

子どもの本だな 64

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

あおい目のこねこ

エゴン・マチーセン さく・え
せたていじ やく (福音館書店)

ねずみの国を見つけにでかけた青い目のこねこが、5匹の黄色い目のねこに会い、いっしょに暮らすことにしました。

ある日、黄色い目のねこたちが犬に追われ、木の上から降りられなくなりました。こねこが、どうしたら犬を追い払えるか考えていると、「わん!」。雷のような吠え声に驚き、跳び上がったこねこは、犬の背中に落ちました。犬はこねこを乗せたまま駆け出し、山を登って、下って、また登って、下って…たどり着いた原っぱは、なんと、ねずみの国でした。

黒の濃淡で描かれ、ねこの目だけが青と黄で色づけされた絵は、ユーモラスで勢いがあり、テンポよく進むストーリーを一層楽しくします。読んでもらえば

4歳から楽しめます。(竹内)

小さい牛追い

マリー・ハムズン 作 石井 桃子 訳 (岩波書店)

10歳のオーラと8歳のエイナル兄弟は、妹2人と両親と、ノルウェーの小さな農場に住んでいました。空想家で本好きのオーラと、わんぱくなエイナルは、何かと張り合っただけです。

夏の間、一家は、村人から預かった牛やヤギを放牧するため、山の上の大きな牧場で暮らします。今年、オーラとエイナルは、「牛追い」をさせてもらえることになりました。牛追いは、牛たちに山の中で草を食べさせ牧場に帰るまで1人で番をする、大変責任のある仕事です。牛追いをした子どもたちはお駄賃がもらえるので、2人はとても張り切っていました。

ところが夏の終わり、役僧さんから預かった牝牛のポティマーがいなくなりました。2人は牛を探すため、何十キロも離れた牧場をいくつも訪ね歩きました。

きびしい自然の中で、子どもたちが遊び働きながら成長していく様子が生き生きと描かれています。牛追いをやりとげた2人の姿に、大きな喜びと満足感を味わえるでしょう。続編に、秋から冬を描いた『牛追いの冬』があります。9歳くらいから。(池之上)

2月	3月	2・3月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
7日	7日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
14日	14日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
21日	21日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

<お知らせ>

13歳からの読書会

- 『ドリトル先生航海記』を読んで
- 日時：2月11日(月・祝)
10:30~12:00
 - 場所：図書館 読書会室
 - 対象：中学生以上(要申込)
 - 準備：当日までに本を読んできてください。

『ドリトル先生航海記』
(ヒュー・ロフティング 作 岩波書店)
動物の言葉がわかるドリトル先生と一行は、大博物学者ロング・アローを探す航海に出ました。巨大なカブトムシを手がかりにロング・アローを救出し、大カタツムリに乗って帰還するまでの物語。

『モンテレッジオ 小さな村の旅する本屋の物語』

内田 洋子 著

方丈社 346頁 2018年4月刊 1,800円 (請求記号) 024.3

1800年代のイタリア半島で、籠に本を詰めて、貧しい山村から各地へ本を売り歩いた行商人たちがいた。彼らの故郷は、モンテレッジオ。現在の定住人口は32人、山と溪谷に囲まれた過疎の村である。その村で、毎夏「本祭り」が開催されるといふ。モンテレッジオ出身の人々は、代々本を大切に売り歩いた祖先を誇りにし、夏には「本に呼ばれて」村に帰ってくるのだ。

元々、貧しい山村の人々は、豊かな農村へ出稼ぎに出ていた。しかし、1816年は異常気象で農作物がほぼ全滅、出稼ぎ先もなく、生きていくために山でとれる栗や茸、枯れ枝の束、聖人の御札や暦、砥石などを売りに出た。行商人たちの通行許可証に記された職業は、年代を経て変わっていく。「石、および雑貨の小売り」から「砥石と聖者の御札売り」「農業、歯科医、および石売り。そして本も売る」と。

まだ読み書きのできない人が多い時代に、なぜ本なのか。どのように本を探し当て、仕入れ、売り先を見つけ出したのか。著者の疑問は膨らむばかりだった。村を訪ねては、村人や村から都会に出て本屋を営む人たち、村につながる人々に話を聞き、当時の資料を丹念に調べ、疑問は少しずつ明らかになっていく。

1800年半ばに始まったイタリア統一運動によって、独立の機運が高まり、民衆は革命家の思想を知りたがった。イタリアじゅうが自由に飢えていた時代。書店は高価で難しい専門書売るのが、行商人たちは小出版社の売れ残りを丹念に集めて売り歩き始めた。庶民には冒険や恋愛もの、革命分子には政治や思想ものを。行商人たちは都市部を売り歩きながら人々が欲しいがる情報を集め、仕入れの際に出版社に伝えた。「本を運んで、行商人はイタリアの歴史を底から変えたのである」と著者はいう。

モンテレッジオの行商人たちは、「イタリアの隅々まで本を届ける胆力と脚力が強み」であり、その強みと本売りの魂を子や孫に教え、代々本売りになった。現在、その子孫たちが営む書店には、居心地の良い、立ち寄りたくなる空間と、新刊であれ古本であれ、欲する本を的確に探し出してくれる人が存在する。著者を含め、本を愛する人々の静かな情熱があふれている。

(池田)

2月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28		

3月の開館日

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

野鳥講座—身近な鳥のお話—

- ・日時:平成31年3月24日(日) 10:00~12:00
- ・講師:三木敏史氏(日本野鳥の会会員)
- ・場所:あすかホール ミニシアター
- ・定員:65名(要申込)
- ・対象:小学4年生以上

- *カレンダーの×印は休館日
- *■は館内整理日
返却のみ受付(10:00~17:00)
- *開館時間は10:00~18:00
金曜日は20:00まで開館

地下水

太子町立図書館で働き始めて10ヶ月が経過し、気が付けば年が明けていた。何もかもが初めてで右往左往していた春先に比べると、新しい環境にも随分と慣れ、適度な緊張とリラククスした気持ちで仕事をしている。

そんな中、年明け早々に、子どもにストーリーテリングを行う「おはなしの時間」を担当することになった。子どもにお話を語ることは、図書館において、とても大切な仕事である。大人からお話を聞く体験は、子どもの読書習慣を育む手助けをする。

やりがいを感じたが、「おはなしの時間」は30分あり、4〜5歳の子どものにとっては長いのではないかと思った。「文福茶釜」のお話を準備し、いざ語り始めると、前のめりになって聞く姿が見られた。お話が終わるまで、語り手である私から目を離さない子や、茶釜に化けた狸を小僧が火にかける場面で、友達と目を見合わせてクスクス笑う子どももいた。続けて「いたずらきかんしゃちゅうちゅう」の読み聞かせも行ったが、最後まで聞いてくれた。楽しい時間は早く過ぎるというが、30分があつという間に終わった感じがした。私の好きなお話を、子どもと共有できたような気がして嬉しかった。(光藤)

